

# 日本におけるキリスト教の歩み

## その3 禁教令・弾圧から鎖国-4

1636年出島完成

島原の乱

江戸時代

鎖国

オランダ、中国を除き鎖国

1603～1688

1603～1685

潜伏キリシタン時代

郡崩れ  
絵踏・宗門改め

1637年天草と島原で農民一揆が勃発。農民たちの領主への抵抗が原因。しかし、天草の農民は、城を攻撃出来ず、やむなく有馬に逃避。そこで出会ったのが、農民のリーダーとなるジェロニモ益田時貞（天草四郎）18歳であった。彼らは浪人たちの援助を得て戦いを始めた。島原と天草の農民たちは団結し、領主たちと戦った農民一揆だった。農民たちは、有馬の原城に立て籠り大名率いる幕府軍と戦った。その数37,000人という。それに対し幕府軍12万人の兵を集結、原城を包囲した。オランダ船からの砲撃も受けた天草四郎率いる農民軍は、1638年四月半ば幕府の総攻撃を受け17,000人の戦死。女と子供の2万人は、棄教を拒み殉教した。数ヶ月に及んだ農民一揆の戦いだったが、内実はキリスト教と幕府軍の戦いで、幕府軍は総力を挙げて攻撃し勝利した。農民側の首謀者天草の首は長崎の首塚へ。幕府はこの勝利を機にポルトガル人を日本から追放し、国交を断絶。

当時長崎には大勢の外国人たちが住み着き、日本人と結婚し子供もいた。彼らの家は宣教師や潜伏キリシタン達の格好の隠れ家だった。そこで將軍家光は、キリシタン取り締まりと外国人を管理する為、1636年出島を建設し全ての外国人と二世達をそこに移転させた。同年秋、全ての二世は、マカオへ戻る船に乗せられ、母親を置き去りに追放されるという悲惨な出来事が起った。鎖国で起きた悲しい出来事であった。1639年全ポルトガル人は宣教師を手引きしたとし追放、この年96年間、長崎を生んだマカオとの貿易に終止符。代わって平戸からオランダ人を呼び寄せ1641年出島に移転。これに先立つ1640年、マカオ市民は日本との貿易再開を願い危険承知で来訪したが、將軍家光は使節57人を西坂の丘で処刑した。

宣教師達は殉教覚悟で日本に潜入するも、すぐに捕まり西坂の丘で殉教を繰り返した。幕府はもうすぐキリスト教の火が、消えることを期待した。しかし、潜入した宣教師は、殉教前に信仰者の守護の為、信心会、ミゼリコルディア、ロザリオ、聖母、ご聖体の会等の共同体を作りキリシタン達の地域共同体を構築した。また互いに支え合う為、各々の役を決め、その務めを果たす為に祈りを徹底した。コンチリサン・痛悔の祈りは、偽善（二重面）の助けの大きな役割をした。また当時潜伏伝道士で有名な外海のバスチャンは、殉教するまで信者の為に奉仕した。今も長崎でその名を知らない人はいない。彼の残した言葉『今から七世代たつとパードレ達が日本に戻る』は有名。

1658年大村にキリスト教を教える者がいる噂を聞くと、長崎奉行の役人はそれらしき者全て捕らえ600人以上の人を処刑した。日本全土からキリシタンの種を徹底的に根絶した。また処刑した者の首と胴体は復活を恐れ、別々に遺体を葬った。1661年～1773年豊後の迫害、1664年以降、尾張で数千人捕縛、殉教。外海にいた信者は五島に逃れた。